

中国語母語話者によるフォーカス発音に関する一考察

一意図伝達に影響する要因を中心に―

趙 氷清

要 旨

これまで、中国語母語話者によるフォーカス発音に問題点が存在することが先行研究で度々指摘されてきた（廖 2010、楊 2011）。本研究では、中国語母語話者によるフォーカス発音に注目し、意図伝達¹に影響する要因を解明するために、中国語母語話者の生成調査と日本語母語話者の判定調査を実施した。その結果、中国語母語話者によるよく伝わるフォーカス発音と伝わりにくいフォーカス発音の韻律的特徴が解明され、フォーカス発音の意図伝達に影響する要因が明らかになった。本研究の結果から、アクセント型の正否、後続する助詞の高さやポーズの位置等が、フォーカスの意図伝達と関係していることが浮き彫りになった。本研究の結果を踏まえた上で、「正確さ」の重要性の見つめなおし、フォーカス発音の体系的な指導の必要性、中国語母語話者対象のスピーチ指導の注意点という3点をめぐって、今後の日本語音声教育に提言した。

キーワード

フォーカス発音 韻律的特徴 意図伝達 音声教育 母語転移

1. はじめに

日本語学習者が多様化している中、日本社会でより高度な社会参加と自己実現を目指す学習者が増えてきている（戸田 2011）。彼らはスピーチや学会発表などの場面で日本語を使って情報を発信する事が多々ある。しかし、日本語学習者によるゼミ発表や学会発表、スピーチなどが聞きづらく、分かりづらいということは度々指摘されてきた（石崎 2001、中川 2003）。その原因として、三浦・深沢（1998）は音声面の問題に起因すると指摘した。その中で、窪菌（2008）は、表記では同じ文でも、発音のフォーカスによって意味が変わってしまうことさえあると述べた。フォーカスは一文中の一番伝えたい内容を表し、フォーカス発音が情報伝達において極めて重要であると言えよう。

従来の中国語母語話者のフォーカス発音に関する研究では、ピッチ（高さ）の問題しか触れられていない（廖 2010、楊 2011、張 2012）。しかし、実際に中国語母語話者の発表を聞くと、音を伸ばして強調するケースが多く、フォーカスの表現が不自然でわかりにくいと感じることが多い。中国語母語話者によるフォーカス発音を全面的に解明するために、高さ以外にも、長さ、強さ、ポーズなどの要因についての研究が必要とされるが、管見の限り見当たらない。また、彼らのフォーカス発音の意図伝達に影響する要因について解明する必要があるが、それについての研究も未だにない。本研究では、中国語母語話者によるフォーカス発音を高さ、長さ、強さ、ポーズの4つの項目から分析し、よく伝わるフォーカス発音と伝わりにくいフォーカス発音の韻律的特徴を解明することにより、フォーカス発音の意図伝達に影響する要因について考察する。その結果を踏まえた上で、フォーカス発音の指導上の注意点について今後の日本語音声教育に提言したい。

本研究で扱う「フォーカス発音」とは、フォーカスを音声的に表現する際の発音である。郡（1989b）はフォーカスによって文全体のイントネーションが影響を受けると述べたため、本研究で扱う「フォーカス発音」の研究対象はフォーカス情報を含む文全体の高さ、長さ、強さ、ポーズとする。

2. 先行研究の整理と問題点

2.1 日本語のフォーカス発音に関する研究

日本語のフォーカス発音についての研究は、郡（1989a）、郡（1989b）、杉藤（1991）、前川（1997）、窪菌（2008）、楊（2011）などが挙げられる。その中で一番代表的なのが郡（1989b）である。郡（1989b）によると、「フォーカスがフォーカスのある語の音調だけでなく文全体の音調、すなわちイントネーションに関わっている」（p.320）と指摘した。具体的には、フォーカスがある語では語アクセントによる音調の山が高まり、以降の語群はアクセントの山が抑えられる。高さ以外の要因について、文節末の助詞あるいは語末拍を高める方法とフォーカスのある語の直前、あるいは直後、あるいはその両方にポーズを置く方法がある。フォーカスと音の強さ、長さとの関係について、強さや長さでフォーカスの対応関係は高さでフォーカスの対応関係に比べればずっと弱く、その役割は副次的なものにしかなり得ないと郡（1989a）は述べている。

日本語のフォーカス発音に関する先行研究をまとめると、日本語のフォーカスを音声的に表現する場合、高さの変化が最も良く使われ、その次にポーズ、長さ、強さの変化も併用されることが明らかになった。

2.2 中国語のフォーカス発音に関する研究

中国語のフォーカス発音について、松本（1986）は中国語のフォーカスにはポーズによるフォーカスと「重音」によるフォーカスがあると述べた。ここで言う「重音」は「重読」とも呼ばれ、文字通りの意味では「強く発音する」ということを指すが、その「強さ」に対して、馮（2007）は以下のように解釈した。「中国語は高さアクセントとストレスアクセントが共存する言語であるが、プロミネンスは高さではなく、強さとして現れる」（p.351）

そして、ここで言う「強さ」とはあくまで聴覚的感觉を表す概念であり、「音響的指標として、感覚上の強さが現れる最も顕著な特徴は持続時間の変化である」(p.351)。つまり、中国語のフォーカスは持続時間の変化として最も顕著に現れるということである。以上の先行研究から、中国語でフォーカスを表現する際に、「長さ」の変化が最もよく使われ、日本語とは違うことが明らかになった。

2.3 中国語母語話者の日本語のフォーカス発音に関する研究

中国語母語話者による日本語のフォーカス発音に関する先行研究は、廖（2010）、楊（2011）、張（2012）が挙げられる。廖（2010）によると、中国語母語話者による日本語のフォーカス発音の特徴は、フォーカス語のピッチが高くなるが、フォーカス語に後続する単語のピッチを抑えないことである。張（2012）も中国語母語話者のフォーカス発音について、「非フォーカス語のピッチがフォーカス語より高くなる場合がある。フォーカス語のアクセントのピッチレンジが狭く、フォーカス語と非フォーカス語の間に相対的な高低の差が顕著には表れない」(p.102)と述べた。楊（2011）は中国語母語話者を対象に中立文とフォーカス文の産出調査を行った結果、似たようなピッチ曲線が現れ、中立発話とフォーカス発話の区別がつかないことを明らかにした。以上の研究はいずれもピッチ（高さ）を中心に、中国語母語話者のフォーカス発音の問題について議論した。

一方、以上の中国語母語話者のフォーカス発音に関する先行研究はフォーカスに関わる諸音声項目の中からピッチの問題しか言及していない。日本語のフォーカス発音に関する先行研究及び母語転移の面を考えると、長さ、強さ、ポーズなどの音声項目も視野に入れた研究が必要とされるが、管見の限り見当たらない。また、中国語母語話者の発音に対して日本語母語話者がどのように判定するか、さらに、意図伝達に影響する要因は何かについても解明する必要があるが、それらの研究も未だにない。本研究は、以上の先行研究を踏まえた上で、中国語母語話者のフォーカス発音を高さ、長さ、強さ、ポーズの4つの項目から分析し、また日本語母語話者の判定を考慮に入れて、フォーカス発音の意図伝達に影響する要因を明らかにしたい。

3. 調査方法

3.1 調査目的

本調査は、中国語母語話者によるよく伝わるフォーカス発音と伝わりにくいフォーカス発音の韻律的特徴を解明することと、中国語母語話者のフォーカス発音の意図伝達に影響する要因を明らかにすることを目的とする。それを踏まえた上で、フォーカス発音の指導上の注意点について提言したい。

3.2 調査協力者

3.2.1 中国語母語話者

本研究の協力者は、調査時仕事や留学のため日本に在住している中国語母語話者（以下、CS）10名である。音読の内容をよく理解していないとフォーカス発音に支障が出やすく、

また、上級になるにつれ、発表やプレゼンテーションでフォーカスをうまく発音したいと望む学習者²も増えると考え、協力者を「N1 資格を持ち、かつ日本語による発表の機会がある者」を基準として選定した。

3.2.2 日本語母語話者

本研究では日本語母語話者（以下、NS）4 名にフォーカスの位置の判定調査を依頼した。学習者は日常的にさまざまな出身地や背景の人と接する環境を考え、NS 協力者の出身地や年齢、日本語教育背景などは特に定めなかった。調査後、音声判定者間における音声判定の相関関係を求めた（本稿 4.1.1 参照）。

3.3 音読調査文

調査文を作成する際に、以下の点を考慮して作成した。

- ① 音読の内容はスピーチや口頭発表などの場面によく出現する表現、内容である。
- ② すべての音読文に前部要素と後部要素を設定し、文脈により前部と後部のどちらかにフォーカスを入れることが可能な文である³。
- ③ 異なるアクセント型がフォーカス発音のピッチ曲線に影響するため（郡 1989b）、アクセント型がフォーカス発音に及ぼす影響を考慮し、前部要素は「起伏式＋起伏式」、「平板式＋起伏式」、「起伏式＋平板式」「平板式＋平板式」の 4 種類のアクセントを含む文を選定した。
- ④ フォーカス部分の長さがフォーカス発音に及ぼす影響を見るため、後部要素は起伏型の文節に統一し、それぞれ 1 文節、2 文節、3 文節からなる文を選定した。

以上の 4 点を踏まえた上で、本研究で用いた調査文は下記の表 1 に記す。S1 から S4 までの調査文をそれぞれ 2 通りの読み方で読んでもらった。1 つ目は前部の下線の部分（以下、前部要素）を強調して読んでもらい（以下、前部フォーカス）、2 つ目は後部の下線の部分（以下、後部要素）を強調して読んでもらった（以下、後部フォーカス）。

表 1 音読調査文

S1 前部フォーカス	<u>中国の方々</u> は八方美人という言葉をご存知でしょうか。
S1 後部フォーカス	中国の方々は <u>八方美人</u> という言葉をご存知でしょうか。
S2 前部フォーカス	<u>アメリカのみなさん</u> は八方美人という言葉をご存知でしょうか。
S2 後部フォーカス	アメリカのみなさんは <u>八方美人</u> という言葉をご存知でしょうか。
S3 前部フォーカス	<u>介護の体験</u> から他人を思いやることの大切さを学びました。
S3 後部フォーカス	介護の体験から <u>他人を思いやることの大切さ</u> を学びました。
S4 前部フォーカス	<u>留学の経験</u> から初心を貫くことを学びました。
S4 後部フォーカス	留学の経験から <u>初心を貫くこと</u> を学びました。

3.4 調査手順

本調査は、2015 年 10 月から 2016 年 1 月にかけて、早稲田大学日本語教育センターの防音室で実施した。録音には IC レコーダーを用いた。

3.4.1 生成調査

予備調査では同じ文の前部フォーカス→後部フォーカスという順で読んでもらったが、協力者が2種の読み方の違いにとらわれてしまい、自然なフォーカス発音ができなかった例が見られた。そのため、本調査では、4つの文の2種の読み方で合計8の調査文をExcelでランダム順にしてから協力者に提示し、なるべく自然発話に近い環境で音読してもらった。生成調査の手順は以下のとおりである。

- ① ルビ付きの調査文が書いてある調査説明書を渡し、意味が理解できるかどうか確認し、「下線部分の内容を強調して読んでください」と中国語で説明した。
- ② 各音読文は協力者自身が納得できるまで練習してもらった。
- ③ 録音を開始する前に、音読説明書を回収した。
- ④ ランダム順にした調査文を一枚ずつ渡し、一文ずつ音読してもらった。音読する前に中国語で「下線の強調の部分が分かるように読んでください」と指示した。読み間違えた場合や自分の発音に納得できない場合はその文を最初からもう一度読み直してもらった。
- ⑤ 全部読み終わった後、それぞれの文をどういうふうに工夫して読んだかについて簡単な半構造化インタビューを行った。

生成調査後、協力者の音声データをGoldWave (Ver5.67.0.0) で一文ずつ抽出し、WAVEファイル化した。抽出された音声データをS1、S2、S3、S4ごとにランダム順に配列し、番号をつけてそれぞれ4つのファイルにまとめた。

3.4.2 判定調査

判定調査は、生成調査の協力者の音声データを聞いて、日本語母語話者がフォーカスの位置を判定する調査である。判定する前に、「音声データを聞いて話者がどこを強調したいのかを判定してください」と指示した。判定結果を判定シートに記入してもらった(図1)。記入方法として、音声を聞いてフォーカスされたと判定したところに○をつけてもらった。具体的には、前部フォーカスに聞こえる場合「-2」、やや前部フォーカスに聞こえる場合は「-1」、フォーカスがないと聞こえる場合は「0」、やや後部に聞こえる場合は「1」、後部に聞こえる場合は「2」というふうに記入してもらった。また、フォーカスが多箇所にあると判定する場合は、フォーカスだと聞こえるところに全部○をつけてもらうようにした。判定調査は以下の手順で実施した。

- ① 判定内容の文が記載された調査説明書を渡し、判定の方法を説明した。
- ② 正式な判定を開始する前に、練習問題を2問練習してもらい、判定方法が理解できたことを確認した。
- ③ 評価シートを渡し、ランダム順になった音声データを1つずつ再生し、フォーカスの位置を判定してもらった。判定ができるまで何度でも再生可能である。一問が終わってから次の文を再生した。

休憩をはさみ、1名の判定者につき、2つのファイルの文の音声を判定してもらった。また、1つの音声ファイルにつき2名の判定者に判定してもらった。

<u>-2</u>	<u>-1</u>	<u>0</u>	<u>1</u>	<u>2</u>
(前部)	(やや前部)	(中立)	(やや後部)	(後部)

図1 音声判定の評価シート

その後、判定者に判定してもらった結果に基づいて各発話の得点を算出する。判定者がつけた判定結果と得点の関係は表2に示したとおりである。1つの発話に2箇所がつけられた場合はその2箇所の得点の和を得点とする。2人の判定者による得点の平均点をその発話の最終得点とする。最終得点はこの発話の伝達度を表す。

表2 得点の算出方法

NSの音声判定結果	-2(前部)	-1(やや前部)	0(中立)	1(やや後部)	2(後部)
前部フォーカスの場合 の得点 (点)	2	1	0	-1	-2
後部フォーカスの場合 の得点 (点)	-2	-1	0	1	2

例として、ある前部フォーカスの文に対する2名の判定者の音声判定の結果を図2に示す。表2を参照すると、前部フォーカスの場合-2(前部)が2点となるため、NS1による採点は2点と-1点の和である1点になる。NS2による採点は1点である。この発話の最終得点はNS1とNS2による平均点である1点になる。

NS1	<u>-2</u>	<u>-1</u>	<u>0</u>	<u>1</u>	<u>2</u>
	(前部)	(やや前部)	(中立)	(やや後部)	(後部)
NS2	<u>-2</u>	<u>-1</u>	<u>0</u>	<u>1</u>	<u>2</u>
	(前部)	(やや前部)	(中立)	(やや後部)	(後部)

図2 音声判定得点の算出例

3.5 分析方法

3.5.1 評価基準

本研究では、フォーカス発音の得点に基づき、①よく伝わったフォーカス発音 ②伝わらなかったフォーカス発音 ③フォーカスが多箇所にある発音 の3種の発音を洗い出して分析した。本論文において、よく伝わったフォーカス発音とは判定者の2名ともフォーカスを正しく判定できた発音を指す。つまり、最終得点が満点(2点)の発音である。伝わらなかった発音とは2人の判定者による最終得点が0点以下、つまりフォーカスがないもしくはフォーカスが別の位置に聞こえた発音である。フォーカスが多箇所にある発音とは2名の判定者とも前後両方にフォーカスがあると判定した場合、あるいは1名の判定者により前後両方に強いフォーカスがある(-2と2)と判定した発音を指す。なお、伝わらなかったフォーカス発音とフォーカスが多箇所にある発音はいずれも伝わりにくいフォーカス発音であるため、分析する際に「伝わりにくいフォーカス発音」のカテゴリにまとめ

て分析した。

3.5.2 統計分析と音響分析

本研究では、フォーカス発音の韻律的特徴を高さ、長さ、強さ、ポーズの4つの項目から分析を行った。3.5.1の評価基準で洗い出された3種の音声データに対し、SUGI Speech Analyzer (Ver2.1.0.4) を使って音響解析を行い、音声波形、ピッチ曲線、音圧曲線、広帯域スペクトログラムを抽出し、F0の最大値、音圧の最大値、発話時間、無音区間をそれぞれ測定した。それに基づき、高さ、長さ、強さ、ポーズに対応する、各部分のF0最大値、1モーラ長、音圧最大値、ポーズの位置と長さを特定し⁴、算出した。

統計分析では、集計された音声判定の結果と各発話のF0最大値の比、1モーラ長の比、音圧最大値の比⁵と合わせて分析を行った。IBM SPSS Ver.22 (<http://www-01.ibm.com/software/jp/analytics/spss/>) で音声判定の得点(伝達度)と高さ、長さ、強さとのそれぞれの相関関係を調べた。

音響分析では、上記の基準により集計されたよく伝わったフォーカス発音と伝わりにくいフォーカス発音に対して音響分析を行った。それぞれのグループの韻律的特徴を整理、抽出したことにより、よく伝わるフォーカス発音と伝わりにくいフォーカス発音の韻律的特徴を解明し、意図伝達に影響する要因を考察した。

4. 調査結果と分析

4.1 統計分析の結果

4.1.1 判定者間の判定の相関

まず、判定者間の判定の一致度を見るために、同じ発話を判定した2名の判定者間の点数の相関について調べた(NS1とNS2、NS3とNS4は同じ発話を判定しなかったため、その間の相関係数を求めることができない)。その結果、いずれの判定者間においても中程度の相関⁶が認められたため(表3)、本調査の判定用データとして使用するのが妥当であると判断した。

表3 判定者間の相関係数

	NS1	NS2	NS3	NS4
NS1	1.0			
NS2	—	1.0		
NS3	0.675**	0.623**	1.0	
NS4	0.542**	0.664**	—	1.0

4.1.2 フォーカスの位置と伝達度の関係

各発話の点数を前部フォーカスと後部フォーカスに分けて集計し、その平均点を t 検定で調査したところ、前部フォーカスが後部フォーカスより有意に点数が低いことが認められた($t(39)=-3.836, p=.000$) (表4)。つまり、中国語母語話者にとって、前部フォーカスの発音は後部フォーカスより難しく、伝達しにくいことが明らかになった。

表4 前部フォーカスと後部フォーカスの点数の統計量

		平均値	N	標準偏差
フォーカス	前部	.575	40	.641
	後部	1.131	40	.560

4.1.3 高さ、長さ、強さと伝達度の関係

各発話の高さ、長さ、強さと得点の相関関係を調べた。まず、高さについてすべての発話の F0 最大値の比と得点の相関関係について調べたところ、高さと得点には相関関係が見られなかった ($r=0.183$, $p=.104$)。また、前部フォーカスと後部フォーカスを分けて相関関係を見たところ、前部フォーカスにおいて高さと得点の相関関係が見られなかったが ($r=0.065$, $p=.691$)、後部フォーカスにおいて高さと得点に弱い相関関係が見られた ($r=0.396$, $p=.011$)。長さと強さと得点の間には相関関係がほとんど見られなかった ($r=-0.015$, $p=.893$, $r=0.064$, $p=.571$)。また前後に分けて集計しても相関関係が見られなかった。

高さ、強さ、長さの中で、後部フォーカスの場合のみ、高さと得点の間には弱い相関関係が見られた以外、長さと強さは得点とはほとんど相関がないことが明らかになった。つまり、母語話者が CS 協力者のフォーカス発音を判定する際に、高さ、長さ、強さの中で高さの変化を比較的に重要視し、長さと強さは判定への影響が小さいことが明らかになった。そして、フォーカス部分自体の高さ以外にも、助詞の高さやポーズなどの要素が判定結果に影響することが推測された。4.2 の音響分析では、それらの要素についても分析する。

4.2 音響分析の結果

4.2.1 よく伝わったフォーカス発音の韻律的特徴

よく伝わったフォーカス発音とその F0 最大値、1 モーラ長、音圧最大値、ポーズの位置と長さの情報を表5に記す。

表5 よく伝わったフォーカス発音とその韻律情報

	F0最大値				1モーラ長		音圧最大値		ポーズ	
	前部要素	前部助詞	後部要素	後部助詞	前部要素	後部要素	前部要素	後部要素	前部要素(中/)後	後部要素(中/)後
B1前	295 ↑	227	253	×	137 ↑	103	-18 ↑	-21	332	×
M4前	275	254	295 ↑	×	164 ↑	132	-17 ↑	-25	193	×
Z4前	334 ↑	×	256	×	140 ↑	133	-24	-24	708	×
G1後	160	×	193 ↑	×	111	117 ↑	-21	-18 ↑	504	383
W1後	145	×	221 ↑	×	124	125 ↑	-23	-18 ↑	203	×
G2後	151	×	199 ↑	×	108	113 ↑	-21	-17 ↑	492	330
J2後	308	×	315 ↑	×	133 ↑	127	-19	-16 ↑	430	402
G3後	187	×	195 ↑	×	95	117 ↑	-14	-13 ↑	886	×
K3後	155 ↑	×	147	153	125	127 ↑	-17	-18	342	293
X3後	302	×	306 ↑	×	160	173 ↑	-17	-16 ↑	428	332/206

注：B1 前は協力者 B による S1 の前部フォーカスの発音である。M4 前は協力者 M による S4 の前部フォーカスの発音である。以下同様。

全体的に見れば、フォーカス部分が非フォーカス部分より高く、長く、強く発音される

傾向が観察された。J2 後と K3 後のように非フォーカス部分がやや長く、強く発音される発音も見られたが、その差はごくわずかで日本語母語話者の判定には影響を与えにくいと思われる。

高さにおいてもフォーカス語が非フォーカス語より低く発音されたケースがあるが、その場合フォーカス語に後続する助詞が必ず高く発音されたことが観察された (M4 前、K3 後、図 3 と図 4)。つまり、後続助詞の高さはフォーカス部分自体の高さよりも母語話者の判定に影響すると推測される。

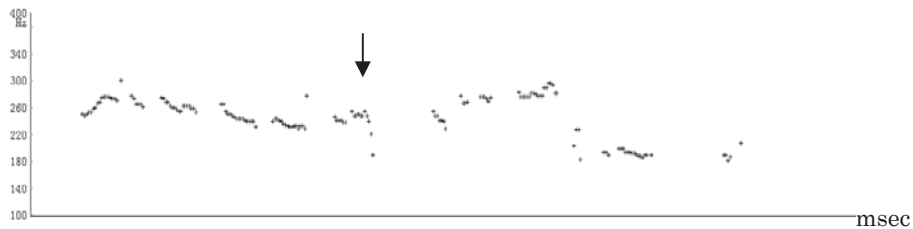


図 3 M4 前のピッチ曲線 (矢印が前部助詞のピッチ)

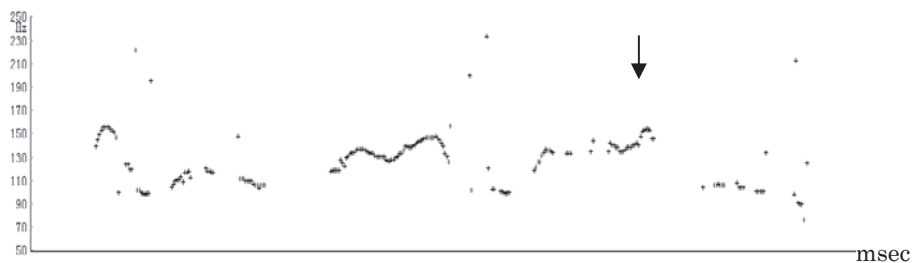


図 4 K3 後のピッチ曲線 (矢印が後部助詞のピッチ)

そして、G1 後、G2 後、J2 後、K3 後、X3 後から見られたように、よく伝わるフォーカス発音の多くはフォーカス部分の後にポーズが置かれたことから、ポーズを置くこともフォーカスの判定に影響する要因であることが明らかになった。

統計分析の結果から、前部フォーカスの伝達度が低いことが明らかになったが、よく伝わった前部フォーカスの文を見ると、いずれもフォーカス部分の後の助詞を高く発音するか (B1 前、M4 前、図 5 と図 3)、フォーカス以降の語群の高さを抑えるか (Z4 前、図 6) の方法が使用された。つまり、前部フォーカスの場合、フォーカス部分を高めるだけではフォーカスが伝達されにくい。

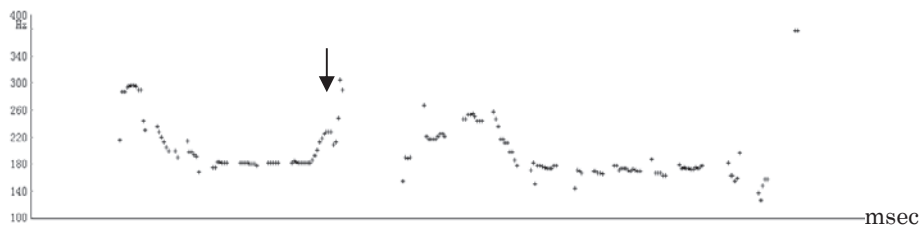


図 5 B1 前のピッチ曲線 (矢印が前部助詞のピッチ)

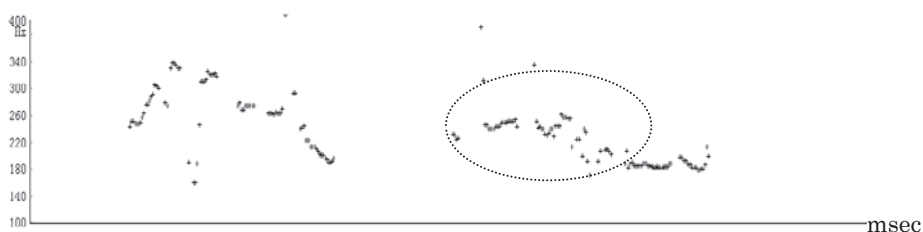


図6 Z4 前のピッチ曲線（後部要素のピッチが抑えられている）

以上の音響分析の結果、よく伝わるフォーカス発音には以下のような韻律的特徴がある。

- 1) フォーカス部分が基本的に非フォーカス部分より高く、長く、強く発音される。
- 2) フォーカス部分の後にポーズが置かれる傾向がある。
- 3) フォーカス部分に後続する助詞が高く発音される。
- 4) フォーカス以降の語群の高さが抑えて発音される。

4.2.2 伝わりにくいフォーカス発音の韻律的特徴

伝わりにくいフォーカス発音とその F0 最大値、1 モーラ長、音圧最大値、ポーズの位置と長さの情報を表6に記す。そのうち、濃い色の部分はフォーカスが間違ったところに判定された発話である。薄い色の部分はフォーカスがないと判定された発話である。白い部分はフォーカスが多箇所にあると判定された発話である。

表6 伝わりにくい発音とその韻律情報

	F0最大値				1モーラ長		音圧最大値		ポーズ	
	前部要素	前部助詞	後部要素	後部助詞	前部要素	後部要素	前部要素	後部要素	前部要素(中/後)	後部要素(中/後)
G1前	220 ↑	×	194	×	119 ↑	117	-20	-17 ↑	614	269
G3前	195 ↑	×	154	×	100	110 ↑	-14 ↑	-15	381	(80)
W1前	211 ↑	×	186	×	120	137 ↑	-17 ↑	-24	421	175
K2前	155 ↑	×	153	×	125 ↑	121	-19	-19	641	×
L1前	286 ↑	×	280	×	161 ↑	121	-23	-22 ↑	411	×
Z1前	249	×	302 ↑	×	157 ↑	105	-29	-28 ↑	742	×
W3前	182	×	183 ↑	×	116 ↑	114	-16 ↑	-21	351	×
L4前	280 ↑	×	250	246	141	142 ↑	-17 ↑	-18	×	×
J1前	334 ↑	×	319	×	145 ↑	109	-23	-23	310	106
K1前	176 ↑	×	159	×	160 ↑	112	-17	-16 ↑	599	×
B2前	302 ↑	×	257	×	129 ↑	118	-16 ↑	-19	150	×
G2前	181 ↑	×	175	×	113 ↑	108	-17 ↑	-20	588	280
L2前	306 ↑	×	259	227	150 ↑	129	-19 ↑	-22	460	×
W2前	209	×	219 ↑	×	131 ↑	100	-18	-18	426	103
L3前	288 ↑	×	239	259	145 ↑	126	-15 ↑	-22	153	61
K1後	167 ↑	×	166	×	143 ↑	128	-16	-16	538	×
K2後	159	×	178 ↑	×	122	122	-19	-14 ↑	597	×
L2後	298	192	309 ↑	×	151 ↑	144	-21	-19 ↑	325	285
M3後	308 ↑	260	300	×	113	142 ↑	-18	-18	475	216/313

K2 前、L1 前を見ると分かるように、フォーカス部分以降の語群の高さが抑えられなければ、フォーカス部分を高く発音してもフォーカスが伝達されない。ひいては、Z1 前、W3 前のようなフォーカス以降の語群がフォーカス語よりも高く発音される場合も見られた。中国語母語話者がフォーカス以降の語群のピッチを抑えない問題点が観察された(図7)。

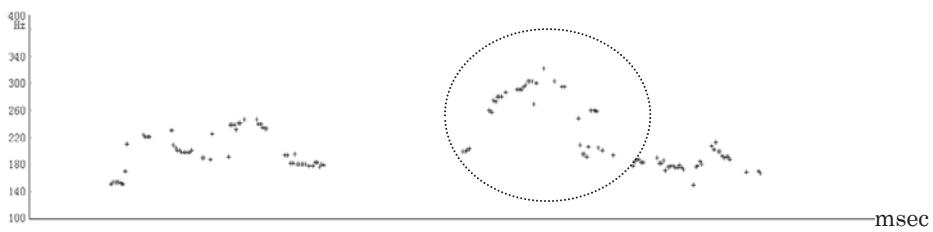


図7 Z1 前のピッチ曲線（後部要素のピッチが抑えられない）

また、表6のL2前、L3前、L4前を見ると、フォーカス語が高く発音されても、非フォーカス部分の後続助詞が高く発音されると、フォーカスの位置が正確に伝達できないことになる。つまり、後続する助詞の音の上昇がフォーカス語自体の高さよりもフォーカスの判定に影響する（図8）。

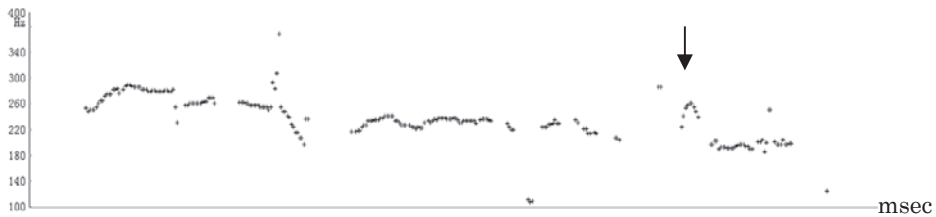


図8 L3 前のピッチ曲線（非フォーカス部分の助詞が高く発音された）

表6のK1後とK2後を見ると、K1後において非フォーカス部分である前部要素が後部要素よりやや高く、長く発音されていた。K2後では、後部要素が前部要素より高く、長く発音された。2つの文の共通する問題点はアクセントの問題である。「中国の方々」と「アメリカのみなさん」の「方々」と「みなさん」はいずれも起伏式アクセントであるが、図9を見ると、この2つの発話においていずれも平板式アクセントに発音されたことが観察された。興味深いのは、同協力者による同じ文の前部フォーカスの場合は、「方々」と「みなさん」がそれぞれ正しいアクセントで発音されたことである。つまり、フォーカスされた語を起伏式、非フォーカス語を平板式に発音するという傾向が観察された。ここから、この協力者はアクセントを変えることを、フォーカスを表現するための1つの方法として捉えようとする意識が伺える。しかし、K1後もK2後もフォーカスの伝達に失敗したことから、アクセントの正否はフォーカスの伝達に影響する重要な要因であることが明らかになった。

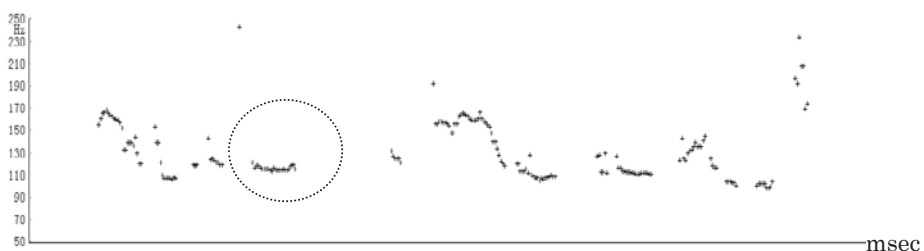




図9 上から K1 後、K2 後のピッチ曲線（「方々」と「みなさん」が平板型に発音された）

そして、よく伝わるフォーカス発音と比べて、伝わりにくい発話には非フォーカス語がフォーカス語より明らかに長く発音される特徴が見られた（表6のW1前、K1後）。特にK1後を見ると、前部にもフォーカスがあると判定されたのは前部要素が長く発音されるためだと推測される。しかし、表6のL1前とZ1前を見ると、長さの変化を利用したにもかかわらず、フォーカスが正しく伝達されなかったケースから、長さの変化がフォーカスの判定において、副次的な役割しか果たせないことが明らかになった。全体的には、中国語母語話者はフォーカス部分を非フォーカス部分より長く発音する傾向が観察されるが、表6のK1後、L2後はフォーカス部分を非フォーカス部分より短く発音したのは、後部要素の「はっぼうびじん」に特殊拍が多く含まれるからだと考えられる。なお、中国語学習者の発音の特徴として特殊拍が不足しがちということを朱（2005）が指摘している。協力者は「はっぼうびじん」を長く発音しようとしても、特殊拍の発音問題で結局非フォーカス部分よりも短く発音されて、意図伝達を阻害してしまった。このような特殊拍の発音の問題がフォーカスの意図伝達にも影響を及ぼすことが窺えた。

そして、フォーカスがまったく逆に伝わった文（表6のG1前、G3前、W1前）を見ると、いずれも非フォーカス部分の後ろにポーズや1モーラに近い無音区間が検出された。特にG3前の場合、前部要素が後部要素より明らかに高く発音されたにもかかわらず、後部フォーカスだと判定された理由は後部要素の後ろにポーズが置かれた影響が大きいと考えられる。つまり、ポーズのフォーカスの意図伝達における影響がフォーカス部分自体の高さよりも大きいことが推測される。また、表6のL4前のようにフォーカス部分の前後にポーズがないと、フォーカスがないと判定されたことから、ポーズはフォーカスの意図伝達に大きな役割を果たしていることが明らかになった。そのため、非フォーカス部分の真ん中あるいは後にポーズを置くと、意図伝達に問題が生じることになる。

強さについて見ると、W1前、W3前、L3前を見れば分かるように、いずれも前部要素が後部要素より明らかに強く発音されたにもかかわらず、フォーカスが正しく伝達されなかったことから、強さのフォーカスの意図伝達に与える影響が極めて小さいか、影響しないことが明らかになった。

以上の音響分析の結果、伝わりにくいフォーカス発音には以下のような韻律的特徴がある。

- 1) フォーカス部分以降の語群の高さが抑えられない。
- 2) 非フォーカス部分に後続する助詞が高く発音される。

- 3) 非フォーカス部分の途中あるいは後にポーズが置かれる。
- 4) フォーカス部分の前後ともポーズが置かれない。
- 5) アクセントに誤用が見られる。
- 6) 非フォーカス部分がフォーカス部分より長く発音される。

4.2.3 フォーカス発音の意図伝達に影響する要因

以上がよく伝わるフォーカス発音の特徴と伝わりにくいフォーカス発音の特徴を照らし合わせるにより、中国語母語話者によるフォーカス発音の意図伝達に影響する要因が浮き彫りになった。具体的には下記の表 7 を参照されたい。

表 7 フォーカス発音の意図伝達に影響する要因

よく伝わる フォーカス発音の特徴	伝わりにくい フォーカス発音の特徴	→	意図伝達に影響する 要因
フォーカス部分に後続する助詞 が高めて発音される	非フォーカス部分に後続する助 詞が高めて発音される	→	各文節に後続する助 詞の高さ
フォーカス部分が非フォーカス 部分より高く、長く、強く発音 される	非フォーカス部分がフォーカス 部分より高く、長く発音される	→	フォーカス部分と非 フォーカス部分の高 さ、長さ
フォーカス以降の語群の高さが 抑えられる	フォーカス以降の語群の高さが 抑えられない	→	フォーカス以降の語 群の高さ
アクセントが正しく発音された	アクセントが間違えて発音され た	→	アクセント型の正否
フォーカス部分の後にポーズが 置かれる	非フォーカス部分の後にポーズ が置かれる フォーカス部分の前後にポーズ が置かれない	→	各文節後のポーズ

以上の表をまとめると、中国語母語話者のフォーカス発音の意図伝達に影響する主要因は以下 5 点である。

- 1) フォーカス部分と非フォーカス部分に後続する助詞の高さ
- 2) フォーカス部分と非フォーカス部分自体の高さ（フォーカス以降の語群の高さが抑えられるか否か）
- 3) フォーカス部分と非フォーカス部分自体の長さ
- 4) アクセント型の正否
- 5) フォーカス部分と非フォーカス部分に後続するポーズ

上記の要因を独立変数に、伝達度を従属変数にして重回帰分析を行った。データの投入方法として強制投入法を使った。重回帰分析の結果を表 8 に示した。重回帰式は以下のとおりである（Y=伝達度、X₁=高さ、X₂=長さ、X₃=後続助詞の高さ、X₄=ポーズ、X₅=アクセント）。

$$Y = -1.358 + 1.514X_1 + 0.075X_2 + 0.374X_3 + 0.402X_4 + 0.325X_5$$

この結果から、高さ、後続助詞、ポーズ、アクセントがそれぞれフォーカスの伝達度に強く影響することが明らかになった。これは音響分析の結果とほぼ一致した。ただ長さの影響に関しては、音響分析の結果ではフォーカスの意図伝達に影響するが、回帰分析では有意な結果が得られなかった。今回の重回帰分析の調整済み決定係数は $R^2=0.546$ であり、決して高いとはいえない。したがって、今後は高さ、長さ、強さ、ポーズ以外の要因も考慮に入れ、予測の精度を上げたうえで、長さという要因をさらに追求する必要がある。一方、表8の偏回帰係数 (β) を見ると、その他の4つの要因のフォーカスの意図伝達に与える影響度が、後続助詞の高さ>ポーズ>フォーカス部分と非フォーカス部分自体の高さ>アクセントの正否という順になっていることが明らかになった。

表8 重回帰分析の結果

	変数名	β	t 値	有意確率
X_1	高さ	0.290	3.547	0.001**
X_2	長さ	0.021	0.255	0.800
X_3	後続助詞の高さ	0.341	3.845	0.000**
X_4	ポーズ	0.335	3.679	0.000**
X_5	アクセント	0.286	3.214	0.002**
修正済み決定係数			$R^2=0.546$	

* β は標準偏回帰係数

5. 考察

5.1 アクセントの正確性が意図伝達にもたらす影響

フォーカス発音の意図伝達に影響する要因を見ると、アクセントの正否は意図伝達に影響する1つの大きな要因であることが明らかになった。アクセントが間違っていると、聞き手である日本語母語話者の注意を引いてしまい、非フォーカス部分でもフォーカスが置かれたように聞こえてしまうことになる。実際に中国語母語話者の発音を聞くと、アクセントの間違いが多数出現するが、それがフォーカスの意図伝達を阻害してしまうことになると本研究の結果で明らかになった。

ここでもっと注意してほしいのは、意図的にアクセント型を変えて、フォーカスを表現しようとする協力者が見られたということである。フォーカス部分を起伏式アクセントに発音し、非フォーカス部分を平板式アクセントに発音する傾向が観察された。協力者がアクセント型を自分の意図通りに操作することは、アクセント型が崩れてはならないという意識とそれに対する指導がまだ足りないからだと考えられる。本研究の成果から、このようなアクセント型に対する操作が学習者の意図に反して、逆に意図伝達を阻害してしまうことが明らかになった。今後の音声教育の中で、アクセント型が崩れてはならないという意識の強化とアクセントの正確さの重要性を見つめなおすという点で日本語教育へ示唆が与えられる。

5.2 文節末助詞をむやみに上昇することが意図伝達にもたらす影響

中国語母語話者によるフォーカス発音の意図伝達に影響する主要因の1つは、文節末助詞の高さである。フォーカス部分の文節末の助詞が高められるとフォーカスが伝達されやすく、逆に非フォーカス部分の助詞が高められると、フォーカスの位置が間違っただけで伝達されてしまう確率が高い。そして文節末助詞の意図伝達における影響がフォーカス部分自身の高さの影響よりも大きいことが明らかになった。つまり、フォーカス部分を高く発音したとしても、非フォーカス部分の文節末助詞が誤って高く発音されると、やはりフォーカスの位置が間違っただけで伝達されることになってしまう。一方、本調査の協力者のフォーカス発音の韻律的特徴から、非フォーカス部分の文節末助詞を高めて発音する現象が多々見られた。そして、本研究の調査は「フォーカスが分かるように」という前提で音読してもらったため、むやみに助詞の高さを上げる現象が抑えられていると推測される。にもかかわらず、フォーカスの位置と関係なく助詞を上げる現象が見られた。これは協力者にとって助詞のピッチを上げることが一種の習慣となり、意図伝達と関連づけていないからだと考えられる。そして、その習慣がフォーカスの意図伝達を妨げる可能性をはらむということを知りたがっている。

ここでもう1つ指摘したいのは、そのような文節ごとに助詞を上げて発音する現象は学習者のみにとどまらず、日本の若者の間にもしばしば見られるということである。このような話し方は「語尾上げ」または「尻上がり」と呼ばれ、先行研究によると、これは若者言葉の1つの特徴であり、最近では若者から日本中に広まっている傾向がある。このような話し方は聞き手にとって耳障りであり、自分の意見を押し付けようとする印象を与え、不快感を持たれる可能性があることが指摘された（洞澤 2000）。若者のこのような話し方が学習者にとってよくない手本になってしまい、学習者はその問題点を知らないままつい真似てしまい、むやみに助詞を上げる習慣を身につけたと推測される。本研究の成果から、文節末助詞のピッチをむやみに上げるにより、意図伝達が大きく阻害されたことが明らかになった。これは日本語学習者のみならず、日本の若者を中心に日本語母語話者にも語尾上げの話し方に注意してもらいたい。

5.3 「長さ」に見られる問題点が意図伝達にもたらす影響

本研究では、協力者は日本語でフォーカスを表現する際に、長さの変化をよく利用することが観察された。一方、フォーカス発音の意図伝達に影響する要因を見ると、長さの変化の意図伝達に与える影響が非常に小さいことが明らかになった。つまり、「長さ」のフォーカスの意図伝達における役割について中国語母語話者と日本語母語話者の認識がずれていることが明らかになった。その原因として、中国語では、フォーカスを表現する際に持続時間の変化、つまり長さの変化が一番よく利用される（馮 2007）。しかし、日本語ではフォーカスを表現する際に、高さの変化が一番よく利用され、長さや強さは副次的な役割しか果たせないことが明らかになった（郡 1989a）。その違いによって中国語母語話者は日本語でフォーカスを表現する際にもフォーカス語を長く発音する方法を主に用いるが、それが日本語母語話者に思うとおりに伝わらないことになってしまう。また、学習者の中でフォーカス語を非フォーカス語の倍近く長く発音する現象が観察されたが、それが等時性

の特徴を持つ日本語において逆に発音の自然さに影響するため、注意しなければならない。

また長さに関して、もう1つの問題点は、フォーカス語を長く発音するつもりでも、特殊拍を発音する際のリズムの崩れにより、フォーカス語が逆に非フォーカス語よりも短く発音されてしまうことである。中国語母語話者の特殊拍が不足しがちだということを朱(2005)がすでに指摘した。一方、日本語のフォーカス発音に関する先行研究から、日本語母語話者がフォーカスを発音する際に、フォーカス部分の長さが非フォーカス部分より長くなることはあるが、短くなることはないことが明らかになった(郡 1989a)。本研究のデータの中にも、特殊拍のリズムの崩れにより、フォーカス部分が非フォーカス部分より短く発音され、結局意図伝達が阻害されたケースが見られた。このことも、音声教育におけるリズム教育の重要性を示唆している。

5.4 フォーカス以降の語群の高さが意図伝達にもたらす影響

中国語母語話者のフォーカス発音に対する母語話者の判定によると、前部フォーカスの文が後部フォーカスの文より有意に伝達度が低いことが明らかになった。その原因として、中国語母語話者はフォーカス以降の語群を抑えないことが考えられる。日本語のイントネーションは「へ」の字型となっており、文頭から文末までだんだんピッチが下がっていく。日本語母語話者はこのようなイントネーションに慣れているため、文頭の語が以降の語群よりやや高く発音されても、イントネーションの自然下降だと捉えがちで、文頭にフォーカスがあるには聞こえない。一方、中国語母語話者による日本語のフォーカス発音の特徴としてフォーカス語のピッチが高くなるが、フォーカス語に後続する単語のピッチを抑えないことを廖(2010)が指摘した。そして、中国語の四声⁷の影響で、イントネーションの上がり下がりが激しいといわれている。このことにより、中国語母語話者は前部フォーカスを表現する際に、フォーカス語を高く発音したとしても、それ以降の語群を抑えずに上がり下がりが激しく発音する。それは日本語母語話者にとって、前部が高いのは当たり前のことであり、逆に後部のピッチの山も激しいことから、後部フォーカスあるいは多箇所にはフォーカスがあると判定してしまうことになる。実際に中国語母語話者のスピーチなどを聞くと、フォーカスが非常に多いと感じたのもこの原因だと考えられる。日本語母語話者はこのような場合、フォーカス部分を際立たせるために後続する要素をすべて抑えて発音することが明らかになった(郡 1989b)。この方法が今回の調査の限りではCS協力者には知られていないため、今後の音声教育に明示的に提示する必要がある。

6. 日本語教育への示唆

6.1 「正確さ」の重要性の見つめなおし

考察の結果から、アクセント型を間違えると、フォーカスの意図伝達が阻害される可能性が明らかになった。また、特殊拍などによるリズムの崩れが結局フォーカスの意図伝達に影響するケースも観察された。従来の研究と指導では、中国語母語話者のフォーカス発音の問題点をイントネーション上の問題として捉えられがちであるが、本研究の成果から、アクセントや特殊拍などの小単位の音声項目の習得もフォーカス発音に影響するというこ

とが明らかになった。最近の音声教育でも、「流暢さ」に目を向けるようになったため、アクセントやリズムなど小単位の音声項目の正確さよりも、「へ」の字型イントネーションなどより大単位の音声項目の指導に重きを置くようになるという風潮が見られた。その逆効果として、全体的にイントネーションさえ合っていれば、アクセント型を軽視する学習者が現れてきた。しかし、本研究の結果から明らかになったように、アクセントや特殊拍など1つ1つの小さな音声項目の正確さが疎かにされると、結局、意図伝達に問題が起こり、コミュニケーションを阻害することになってしまう。本研究の結果を通して、今の音声教育の「流暢さ」重視の風潮の中で、アクセントやリズムなどの「正確さ」の重要性をもう一度見つめなおすべきではないかと考えられる。そしてそれが決して「正確さ」と「流暢さ」を対立させているのではなく、むしろ両方をバランスよく備えられるための指導の工夫が望ましい。

たとえば、中国語母語話者に限っていうと、従来の音声教育ではアクセントの正確さが強調されてきたが、その逆効果として文中のどの位置でも同じ高さの音調の山が続き、文全体のイントネーションが自然ではないと指摘された（中川 2003）。近年ではより大単位の「へ」の字型イントネーションに注目した指導方法に切り替えたが、その反面、アクセント型の正確さが疎かにされ、本研究で見られたようなアクセント型を操作してフォーカスを表現する協力者が現れた。そこで筆者が提案したいのは、両方どちらにも偏らない指導法である。アクセント型は崩れることはないという意識を強化しつつ、「高」と「低」が絶対的な概念ではなく、「へ」の字型イントネーションという大きな波の中の相対的な概念であるということも常に指導の念頭に入れなければならない。そしてそれが実現するための第一歩は、「流暢さ」という風潮に逆らい、アクセントやリズムなどの正確さの重要性をもう一度見つめなおすことである。

6.2 フォーカス発音の体系的な指導の必要性

本研究の調査の範囲では、中国語母語話者は日本語のフォーカスをどのような方法で表現するかについて、「授業で教わったことがない」という声が圧倒的に多かった。そのため、日本語でフォーカスを表現するとき、母語のフォーカスの方法をそのまま援用するか、日本語母語話者の話し方を真似するか、どちらかの方法を採用しかないと推測される。しかし、本研究の成果から明らかになったように、母語転移のため中国語母語話者はフォーカスを表現する際に長さの変化を一番よく利用するが、日本語母語話者は主に高さでフォーカスを判断するため、中国語母語話者によるフォーカスの意図が思うとおりに伝達されない場合が多い。そして、日本語母語話者の音声も全部モデル音声になることができるわけではない。最近若者を中心に文節ごとに助詞を高めて発音する「語尾上げ」の現象が広まっている。それがフォーカスの意図伝達に悪影響を与えることを学習者が知らないまま真似てしまうと、フォーカスが伝達しにくくなってしまう。以上のことから、フォーカス発音の学習を放置して学習者の独学に任せてはならない。1つの音声項目として体系的に指導する必要がある。

たとえば、強調のためにフォーカス以降の語群を抑えることを日本人は無意識のうちに身につけるが、学習者の場合、指導されないとそれを暗示的な知識として身につけるのに

非常に時間がかかる。特に中国語母語話者の場合は母語転移の影響で、抑えないばかりでなく、語尾になっても激しいアクセントの抑揚が続くため、前部フォーカスが非常に伝達されにくいことが本研究の結果から明らかになった。今後の音声指導の中で、前部フォーカスの文に指導の重点を置くべきである。そして、フォーカス部分を高めるだけでなく、フォーカス以降の語群を抑える必要があるというように明示的に提示すれば、文頭のフォーカスの伝達度が大幅に改善されると予想される。

また、若者言葉の特徴と問題点を意識して指導すべきである。むやみに助詞を高めて発音することは、フォーカスの意図伝達に悪影響を与えるということを明示的に提示すれば、むやみに助詞を上げる現象が改善されると予想される。本研究の結果から明らかになったように、今までの指導不足のため、中国語母語話者のフォーカス発音には問題点が多く残されている。今後は、先行研究および本研究の成果を踏まえた上で、フォーカス発音の高さ（助詞の高さ、アクセント）、ポーズ、長さ（リズム）、強さなどのいくつかの方面から体系的に指導する必要がある。

6.3 中国語母語話者対象のスピーチ指導の注意点

本研究の冒頭で述べたように、中国語母語話者による口頭発表やスピーチなどはフォーカス発音の問題点より、内容理解が阻害された事が多い。本研究の結果からも、中国語母語話者のフォーカス発音は意図伝達において問題点が存在することが明らかになった。中国語母語話者のよく伝わるフォーカス発音と伝わりにくいフォーカス発音の韻律的特徴、および意図伝達に影響する要因を総合的に考察することにより、中国語母語話者のフォーカス発音の指導上のポイントが浮き彫りになった。今後のスピーチ指導の中で以下の点に注意して指導することが望ましい。

- フォーカス以降の語群を抑えて発音すること
- 非フォーカス部分の後続助詞の上昇を抑えること
- 感情の変化やフォーカスの位置のいかんを問わず、アクセント型が崩れないこと
- 特殊拍のリズムを注意すること
- フォーカス部分の長さの顕著な変化を抑えること
- フォーカス部分の前後にポーズを置き、非フォーカス部分の後のポーズを抑えること
- フォーカスのポーズを長めに置き、文節内にポーズを置かないこと

7. おわりに

本研究では中国語母語話者のフォーカス発音について、生成調査と日本語母語話者による判定調査を行い、よく伝わるフォーカス発音と伝わりにくいフォーカス発音の韻律的特徴を明らかにし、その意図伝達に影響する要因を解明した。

その結果、中国語母語話者のよく伝わるフォーカス発音の韻律的特徴として、①フォーカス部分が基本的に非フォーカス部分より高く、長く、強く発音される。②フォーカス部分の後にポーズが置かれる傾向がある。③フォーカス部分に後続する助詞が高く発音される。④フォーカス以降の語群の高さが抑えて発音される、という4点が明らかになった。

中国語母語話者により伝わりにくいフォーカス発音の韻律的特徴として、①フォーカス部分以降の語群の高さが抑えられない。②非フォーカス部分に後続する助詞が高く発音される。③非フォーカス部分の途中あるいは後にポーズが置かれる。④フォーカス部分の前後ともポーズが置かれない。⑤アクセントに誤用が見られる。⑥非フォーカス部分がフォーカス部分より長く発音される、という 6 点が明らかになった。

中国語母語話者のフォーカスの意図伝達に影響する要因として、①フォーカス部分と非フォーカス部分に後続する助詞の高さ、②フォーカス部分と非フォーカス部分自体の高さ（フォーカス以降の語群の高さが抑えられるか否か）、③アクセント型の正否、④フォーカス部分と非フォーカス部分に後続するポーズ、という 4 つが挙げられる。そしてそれらの要因がフォーカス発音の意図伝達における重要性として、後続助詞の高さ＞ポーズ＞フォーカス部分と非フォーカス部分自体の高さ＞アクセントの正否という順になっていることが明らかになった。

本研究の結果について、アクセントの正確性、文節末助詞のむやみな上昇、「長さ」に見られる問題点、フォーカス以降の語群の高さから中国語母語話者のフォーカス発音の意図伝達に影響する要因を考察した。さらに、考察結果を踏まえた上で、今後の日本語の音声教育の中で、①正確さの重要性の見つめなおし、②フォーカス発音の体系的な指導の必要性、③中国語母語話者対象のスピーチ指導の注意点の 3 点について提言した。

今後の課題として、まず 4.2.3 で述べたように、本研究で検討した高さ、長さ、強さ、ポーズ以外の要因を考慮に入れ、重回帰分析の予測の精度をさらに上げる必要がある。また、本研究の中で「正確さ」と「流暢さ」をバランスよく備え、フォーカス発音に対する体系的な指導について提案し、6.1 の中でアクセントとイントネーションの指導方法を一例としてあげた。しかし、このような指導方法の有効性と改善点は今後の実践研究の中で検証していく必要がある。この 2 点を今後の課題としたい。

注

- 1 本研究で使用する「意図伝達」とはフォーカスの情報の伝達を指す。具体的には、話し手のフォーカスしたい部分が聞き手の聞き取ったフォーカスの情報と一致した場合は意図が伝達されたという。逆に話し手がフォーカスしたい部分と聞き手の聞き取ったフォーカスの情報と一致しない場合は意図が伝達されなかったという。
- 2 本論文の中で「学習者」は一般的に中国人学習者全体を論じる場合に、「協力者」は本論文の調査にご協力いただいた学習者について論じる場合に分けて使用される。
- 3 文脈により、前部と後部両方ともにフォーカスを入れることも可能であるが、音読を指示する際にフォーカスを前部か後部の一箇所に置くように指示した。
- 4 ポーズの同定方法は石崎（2005）を参考にした。
- 5 F_0 最大値の比 = フォーカス部分の F_0 最大値 / 非フォーカス部分の F_0 最大値、1 モーラ長の比 = フォーカス部分の 1 モーラ長 / 非フォーカス部分の 1 モーラ長、音圧最大値の比 = フォーカス部分の音圧最大値 / 非フォーカス部分の音圧最大値。
- 6 $-0.2 \sim 0.2$ は「ほとんど相関がない」、 $-0.4 \sim -0.2$, $0.2 \sim 0.4$ は「弱い相関がある」、 $-0.7 \sim -0.4$, $0.4 \sim 0.7$ は中程度の相関がある、 $-1.0 \sim -0.7$, $0.7 \sim 1.0$ は強い相関がある。
- 7 形態素の 1 つ 1 つに固有のピッチパターンであり、それぞれ 55, 35, 214, 51 の高さで表記する。

参考文献

- 石崎晶子 (2001) 「自己作文音読における初級学習者のポーズの特徴:英語母語話者 4 名の縦断調査」『日本文化と日本語教育』21、お茶の水女子大学日本言語文化学会、pp.122-127
- (2005) 「日本語の音読において学習者はどのようにポーズをおくか—英語・フランス語・中国語・韓国語を母語とする学習者と日本語母語話者の比較—」『世界の日本語教育』15、独立行政法人国際交流基金、pp.75-89
- 窪菌晴夫 (2008) 「プロソディーの基礎研究と日本語教育」戸田貴子 (編)『日本語教育と音声』、くろしお出版、pp.101-116
- 郡史郎 (1989a) 「フォーカス実現における音声の強さ、持続時間、F0 の役割」『音声言語Ⅲ』、近畿音声言語研究会、pp.29-38
- (1989b) 「強調とイントネーション」『講座日本語と日本語教育 2 日本語の音声・音韻 (上)』明治書院、pp.316-342
- 朱春躍 (2005) 「北京語」日本語教育学会 (編)『新版日本語教育辞典』、pp.45-47
- 杉藤美代子 (1991) 「朗読音声における強調表現の音響的特徴」『大阪松蔭女子大学論集』28、大阪樟蔭女子大学、pp.1-13
- 張若星 (2012) 「中国人日本語学習者が話す日本語と中国語のイントネーションの対比:フォーカス別によるピッチ変動からの分析」(研究発表,日本音声学会 2012 年度 (第 26 回) 全国大会発表要旨)『音声研究』、日本音声学会、16 (3)、pp.102
- 戸田貴子 (2011) 「音声教育と日本語能力」『早稲田日本語教育学』9、早稲田大学大学院日本語教育研究科、pp.59-65
- 中川千恵子 (2003) 「日本語音声指導法に関する一考察—2 種類のプロソディー指導を比較して」『早稲田大学語学教育研究所紀要』58、早稲田大学語学教育研究所、pp.191-212
- 馮蘊澤 (2007)『中国語の音声』白帝社
- 洞澤伸 (2000) 「若者の言語生活に見られる他者の不在:岐阜大学「キャンパスことば」とその周辺事情の考察」『岐阜大学地域科学部研究報告』6、岐阜大学、pp.13-68
- 前川喜久雄 (1997) 「音声学」田窪行則・前川喜久雄・窪菌晴夫・本多清志・白井克彦・中川聖一[著]『岩波講座言語の科学 2 音声』第 1 章、岩波書店、pp.1-52
- 松本丁俊 (1986)『中国語音声学概論』白帝社
- 三浦香苗・深澤のぞみ (1998) 「留学生の口頭発表に対する評価を探る:本当に伝えたいことが伝わるためには何が必要か」『金沢大学留学生センター紀要』1、金沢大学、pp.1-15
- 楊詘人 (2011) 「中国人日本語学習者に見られる発音とイントネーション問題」杉藤美代子 (編)『音声文法』くろしお出版、pp.123-136
- 廖娟慧 (2010) 「日本語のフォーカス生成について—中国人上級日本語学習者を中心に—」『日本語教育研究』56、長沼スクール、pp.71-78

(ちょう ひょうせい 早稲田大学大学院日本語教育研究科・博士後期課程)